



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中世日本の北方社会とラッコ皮交易 : アイヌ民族との関わりで (改訂版)
Author(s)	関口, 明; Sekiguchi, Akira
Description	2013年7月1日改訂
Citation	北海道大学総合博物館研究報告, 6, 46-57
Issue Date	2013-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/52571">https://hdl.handle.net/2115/52571</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	v.6-4_2 rev e.pdf



## 中世日本の北方社会とラッコ皮交易—アイヌ民族との関わりで—

関口 明\* (札幌国際大学人文学部)

### Northern Region Communities and Sea Otter Fur Trade in Middle Ages Japan - in relation to Ainu -

Akira Sekiguchi\* (Sapporo International University)

**Abstract:** From the Edo period, The Urup Island, a part of the Chishima Archipelago (Kuril Islands) located close to Hokkaido, was called “Rakko To” (“To” means island) for the reason of being known as an island inhabited by sea otters. The origin of “rakko”, name for a sea otter in Japanese, can be traced to Ainu language. It has been proved that the fur trade between Ainu and Japanese provided background for its adoption into Japanese language.

In this paper the beginning of “rakko” appearance in Japanese historical materials is examined together with the evidence of its presence in Ainu tales “Yukar”, and a point is being made of answering what was its role in Ainu trade with Japanese.

First chapter provides an argument that the fur was mainly used for harnesses and partly in sheath for Japanese sword as a sign of status.

In the second chapter, based on Japanese historical materials, the following hypothesis is argued: 1) a first known sight of sea otter fur is explained in 1423, 2) in 1433, Japan trades sea otter fur to Min Dynasty, China, 3) in 1434, the Kingdom of Ryukyu supplies Min Dynasty with sea otter fur 4) in the end of 15 century, “rakko” is mentioned in several Japanese dictionaries 5) the route of “rakko” trade goes from Ainu to Kakizaki (Matsumae) to Ando (Tosaminato) to Takeda (Wakasa) to Ashikaga (Kyoto).

Third chapter contains an analysis of “rakko” appearance in Yukar Ainu epic, precisely in Itadorimaru. According to the Itadorimaru tale, “rakko” possessed by princess Kanesantaunmat leaves the mouth of Ishikari River. Then, when it is captured by Poiyaumpe (Ainu hero), the fighting between Ainu living in Hokkaido and tribes of Sakhalin erupts. However, eventually Poiyaumpe wins.

It is my belief that this Yukar tale discusses a dispute over fur trade rights that took place between Sakhalin and Hokkaido, with the story being used as a motif. Yukar depicts the process of Satsumon culture wresting off the rights to “rakko” fur trade from the Ohotsk culture (5th ~ 13th century). Japanese historical materials shows that the Ainu who sprang from Satsumon culture, kept the rights to the “rakko” fur trade.

**Keywords:** Ainu, Okhotsk Culture, Sea Otter Fur, Trade, Yukar

---

\* Corresponding author email: a-sekiguchi@ts.siu.ac.jp

© 2013 Hokkaido University Museum

## はじめに

イタチ科の海棲哺乳動物であるラッコは、本来ウルップ島などの千島列島・アラスカ・カフォルニア沿岸に生息している。このラッコという名称が、アイヌ語の [rakko] に由来する事実は、日本にラッコが流通する背後にアイヌ民族が介在したことを暗示している。なお日本ではラッコを「獵虎」「獺虎」と漢字表記し、時には「海虎」「落虎」と表記する場合もあるが、いずれも読みはラッコである。

ラッコは中世から近世の日本の史料に交易品として姿を現すが、北海道では早くからその存在が知られていたようである。千島列島からの土器の出土は、縄文土器はクナシリ・エトロフ島、続縄文土器はクナシリ・エトロフ・ウルップ・ウシシル・マツワ・シャシコタン島、またオホーツク式土器はクナシリ・エトロフ・ウルップ・シムシル・ウシシル・マツワ・シャシコタン・チリンコタン・シュムシュ島から、一方オホーツク式土器と並行する擦文土器は、クナシリ・エトロフ島に限られている(天野他 2007, 澤井 2012)。

このことは北海道の縄文人・擦文人はラッコと遭遇した可能性はあるが、確実にラッコに遭遇したのは続縄文人とオホーツク人であることを物語っている。しかもオホーツク人はラッコの造形物を残している(大塚 2001・2003)。一つは羅臼町松法遺跡出土のトナカイ角に彫りこまれたラッコ像である。素材のトナカイは北海道に生息しておらず、シベリア・サハリン北部・カムチャツカ半島から入手したものと思われる。もう一つは北見市常呂町常呂川河口遺跡出土のヒグマの犬歯に彫刻されたラッコの牙偶で、8世紀から10世紀のものと推定されている。いずれもラッコの腹部の毛並みを矢羽状に線刻して表現しており、ラッコの生態を熟知していなければ彫れない作品である<sup>1)</sup>。

ところで道内のオホーツク文化の遺跡からラッコの骨があまり出土していない。このことは北海道のオホーツク人がウルップ島まで出かけて捕獲・解体してラッコ皮を持ち帰ったか、あるいはウルップ島に居住するオホーツク人との交易によって毛皮を入手したことを示している。いずれにしろ、羅臼と常呂で出土したラッコ造形物の観察の細かさは、オホーツク人がラッコと極めて近い生活を送っていたことを示唆している。

北海道におけるオホーツク文化の代表的遺跡であるモヨロ貝塚や北見市常呂町栄浦第二遺跡、北見枝幸町目梨泊遺跡から出土している青銅製帯金具などの遺物と、4世紀から8世紀にかけてアムール川中流域に展開する靺鞨文化のナイフェリトや松花江流域の査里巴墓群の金属器との類似性が指摘されており、北海道オホーツク海沿岸とアムール川が交易の道でつながっていたことが確認できる。アムール川の中下流域からは青銅・銀などの装飾品などがもたらされ、オホーツク文化側からは主に毛皮類が交易品として大陸に渡ったと思われる。近世の樺太アイヌは、アムール川下流域とヒグマ・カワウソ・キツネ・タヌキ・テンなどの毛皮を交易していたが<sup>2)</sup>、オホーツク文化期には、これらに加えてラッコが交易品としてサハリンを経由してアムール川流域に運びこまれたと思われる。12世紀末の著作である『桂海虞衡志』に「海獺生海中，似獺而大，毛著水不濡」<sup>3)</sup>とある。この「海獺」に関する情報は、サハリン→アムール川流域→中国というルートで入ってきたものとみなしてよいであろう。

本稿では13世紀ごろにその姿を消したオホーツク文化以後、アイヌ民族がラッコ皮交易にどのように関わり、それがアイヌ民族の歴史形成にどのように関わったのかを、日本側の史料とアイヌ民族のユーカラを素材に検討する試みである。まずその交易先となった日本社会における毛皮利用の状況について考察する。

## 1 古代日本と毛皮利用

『類聚三代格』延暦21年(802)6月24日付の太政官符に次のような史料がある。

禁<sub>レ</sub>断私交<sub>レ</sub>易狄土物<sub>レ</sub>事

右被<sub>レ</sub>右大臣宣<sub>レ</sub>稱。渡嶋狄等来朝之日。所<sub>レ</sub>貢方物。例以<sub>レ</sub>雜皮<sub>レ</sub>。而王臣諸家競買<sub>レ</sub>好皮<sub>レ</sub>。所<sub>レ</sub>殘惡物以擬進<sub>レ</sub>官。仍先下<sub>レ</sub>符禁制已久。而出羽国司寬縱曾不<sub>レ</sub>遵奉<sub>レ</sub>。為<sub>レ</sub>吏之道豈合<sub>レ</sub>如此。自今以後。嚴加<sub>レ</sub>嚴禁<sub>レ</sub>。如違<sub>レ</sub>此制<sub>レ</sub>。必處<sub>レ</sub>重科<sub>レ</sub>。事緣<sub>レ</sub>勅語<sub>レ</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>重犯<sub>レ</sub>。

王臣諸家が、渡嶋(北海道)蝦夷が貢物としてもたらす「雑皮」の中から競って「好皮」を入手しており、しかも出羽国司がそれに加担している様子がうかがえる。

ところで渡嶋蝦夷が貢いだ「雑皮」とはどのような皮であろうか。『延喜式』巻23、民部下に記載されている陸奥・出羽国の交易贓物として、

陸奥国 葦鹿皮。独犴皮数随<sub>レ</sub>得。砂金三百五十兩。昆布六百斤。索昆布六百斤。細昆布一千斤。

出羽国 熊皮廿張。葦鹿皮独犴皮数随<sub>レ</sub>得。

と記されているように、「雑皮」とは「葦鹿皮」「独犴皮」「熊皮」などとみて間違いないであろう。「葦鹿皮」はアシカ科のニホンアシカ・トド・オットセイなどの皮、「熊皮」は北海道産のヒグマの皮、「独犴皮」は北方犬説・アザラシ説などがあり確定できないが、いずれにしるこれらは北海道など北方産の陸獣・海獣の毛皮とみて間違いない。古代の貴族らはこれらの毛皮に群がっていたのである。

このような貴族の毛皮に対する強い需要は中国産の毛皮に対しても同様であった。『類聚三代格』天長5年(828)正月2日付太政官符に、

応<sub>レ</sub>禁<sub>二</sub>交関<sub>一</sub>事

右蕃客賣<sub>レ</sub>物交関者。法有<sub>二</sub>恒科<sub>一</sub>。而此間之人必愛<sub>二</sub>遠物<sub>一</sub>。争以貿易。宜<sub>レ</sub>嚴加<sub>二</sub>禁制<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>更然<sub>一</sub>。若違<sub>レ</sub>之者百姓扶杖一百。王臣家遣<sub>レ</sub>人買。禁<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>言上。国司阿容及自買。殊処<sub>二</sub>重科<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>違犯<sub>一</sub>。

とあり、「蛮客」がもたらす「遠物」を争って求めていたのは、実は「王臣家」が遣わした者であり、しかも国司が「自買」している。先の延暦21年太政官符と同じような状況が起きていることが分かる。

「蛮客」とは前年に来日した渤海使を指すが、彼らがもたらした「遠物」とは何か。『続日本紀』神亀5年(728)正月17日条に貂皮、同じく『続日本紀』天平11年12月10日条に大虫(虎)皮・罽皮7張、豹皮6張、少し時代が下るが『日本三代実録』貞観14年(872)5月18日条に大虫皮7張、豹皮6張、熊皮7張が、それぞれ渤海使によって信物としてもたらされている。貴族らが愛でた「遠物」に大陸到来の虎・豹・貂・罽などの毛皮が含まれていたことは疑いない。

また『日本書紀』天武天皇15年(686)4月19日条に新羅の進物として虎豹皮が見えるように、「遠物」の供給源には朝鮮半島もあった。

これらの毛皮は多くの場合、馬具として使用されたようである。『延喜式』には次のような毛皮に関する規定が掲載されている。

凡五位以上。聽<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>虎皮<sub>一</sub>。但豹皮者。參議以上及非參議三位聽<sub>レ</sub>之。自余不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>聽限<sub>一</sub>。

凡罽皮障泥。聽<sub>二</sub>五位以上著<sub>一</sub>之。

毛皮使用が位階によって規制されていることが注目されるが、虎皮が五位以上、豹皮が参議以上・非参議の三位(公卿)となっている。何に使用されたのか分からないが、罽皮が障泥(下鞍の間に垂らす大型の皮)として五位以上に許されていることから推すと、馬具の可能性が強い。10世紀の後半ころに著された『西宮記』によると、武具が加わっている。『西宮記』16、臨時4には、

尻鞆 豹公卿、虎竹豹四位五位色革、依<sub>二</sub>下襲<sub>一</sub>也、阿多良之六位革紫、依<sub>二</sub>下襲<sub>一</sub>也、犢禁物、班猪上下野望用<sub>レ</sub>之、同<sub>二</sub>使官人、諸衛舍人、

下鞍 豹公卿神事、五位以上通用、虎四位五位、葦鹿六位

とあり、武具と馬具に関する毛皮の身分規定がある。尻鞆(太刀を被う毛皮の袋。鞆を保護するために遠行または戦陣の際に使用)について公卿が豹皮、四位・五位が虎皮・竹豹皮(豹文の大きいもの)、六位は阿多良之(海豹)の皮を使うことなどが規定され、下鞍(鞆とも書き、鞍の下に当てる敷物で、普通2枚を重ね、下を肌付、上を切付という)については公卿と神事の際は五位以上が豹皮、四位・五位は虎皮、六位は葦鹿皮と決まっている。

『延喜式』が9世紀後半ごろに効力をもった条文の集成であるという性格上、『西宮記』の規定を含めて、これらの毛皮を律令的身分秩序に組み込む規定は、9世紀後半から10世紀にかけて出された可能性が強い。

しかし律令政府は成立当初から毛皮使用に一定の身分的制限をつける政策を持っていた。たとえば『続日本紀』靈龜元年(715)9月1日条に、

禁<sub>下</sub>文武百寮六位以下用<sub>上</sub>虎豹羆皮及金銀<sub>飾</sub>甲<sub>中</sub>鞍具並横刀帶端<sub>上</sub>。但朝会日用者許<sub>レ</sub>之。

とみえるように、6位以下の官人が元日の朝賀、節会、蕃客宴会などの日以外の儀式において、鞍具・横刀の帯端を

虎・豹・羆皮や金銀で飾ることを禁じていたのである。ところが各種の儀式には個人調達(関口1987)の物も多く、貴族は珍しい毛皮を身に着け、権威を誇示するために、毛皮入手を競ったと思われる。その結果、延暦21年と天長5年の私交易の禁令を生み、さらに9世紀後半から10世紀にかけて、毛皮を身分制下の組み込む動きに結びついたのである。

ところで毛皮は、参議・三位以上(公卿)が豹皮、5位以上が虎皮・羆皮、6位が海豹皮・葦鹿皮というように、おおよそのランクがあった。豹皮は黒斑のいわゆる豹文、虎皮は黒の縦縞文様があり、その文様の美しさから珍重されたのであろう。羆皮は日本列島における動物界の頂点に立ち、それに対して持つ畏怖の観念が、護身の意味を持たせたのであろう(関口2006)。

しかし海獣はあまり高い地位が与えられなかった。葦鹿皮は『日本書紀』には「海驢」とみえ、敷物として利用されていたが、文様もなく身分を誇示するにはあまりに地味である。主に馬具に使われていたようだが、次第に身分標識とは見られなくなったようである<sup>4)</sup>。海豹はその名前に「ワモン」「ゼニガタ」「クラカケ」とあるように、独特な文様を持っていたためか、高価な扱いを受けていたようである。『吾妻鏡』文治5年(1189)9月17日条に、藤原基衡が毛越寺本尊造立の費用として仏師運慶に「七間々中徑ノ水豹皮60余枚」などが支払われたとある。また13世紀以降も「水豹尻鞆」「水豹泥障」「水豹切付」などが見え、身分を表示する一定の役割を果たしたようである。

毛皮の中で特に異彩を放つのが貂皮である。『延喜式』(41 彈正台)に、

凡貂裘者。参議已上聽<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>之。

とあり、貂皮が裘(皮製の上着)に利用され、その着用が参議以上に制限されていた。これに対応する史料が『日本三代実録』仁和元年(885)正月17日条にある。

是日。始禁<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>用貂裘<sub>レ</sub>。但参議已上不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>制限<sub>レ</sub>。

これにより貂裘の着用が参議以上に制限されたのが仁和元年であることが分かる。この史料が示すように、貂皮は上着に使われていた。上述のように、日本では毛皮を馬具・武具として利用することが多かったが、柔らかく保温性に富むその性質から貴族は裘として身に着け、権威を誇示した。『源氏物語』「末摘花」には、

表着には黒貂(くろてん)の皮衣、いときよらに香ばしきを着たまへり

とあり、11世紀ごろには貂皮が皇族の女性にも着用されていたことが分かる。『御堂関白記』長和4年(1015)7月15日条に「奥州貂裘参領、長二領、一領」とみるように、これらの貂皮は奥州からもたらされたが、その供給源は北海道やさらに北のサハリンが想定されるのである<sup>5)</sup>。

このような毛皮使用の文化、さらに着衣使用の習慣が、15世紀以降ラッコ関連史料が見え始める背景にあったのである。

## 2 中世日本のラッコ関連史料

前述のようにラッコは「獵虎」「獺虎」と漢字表示する 경우가圧倒的に多いが、なかには「海虎」「落虎」と表示する場合もあった。ここでは日本側の史料を涉猟し、ラッコ関連史料から日本ではラッコ皮の流通はいつごろまでさかのぼるのか検討してみる。管見の限りでは従来言われているように、応永30年(1423)条が初見である。

史料(1)『後鏡』応永30年(1423)条

四月大 七日丁巳 賜御内書於安藤陸奥守某。

御内書案載

馬二十匹。鳥五千羽。鷺眼二万匹。海虎皮三十枚。昆布五百把到来了。神妙候。太刀一腰。鎧五領。香合。

盆。金襴一端遺之候也。

卯月七日

安藤陸奥守殿

御内書(ごないしょ)は室町幕府の将軍が発給した私的な書状形式をとった公文書であるが、この場合安藤陸奥守が応永30年3月18日将軍に就いた足利義量に「海虎皮三十枚」などを献上したことに対する書状である。十三湊に居城していた安藤氏は、アイヌ民族との交易権を握り、「鳥」(鷺羽・鷹羽か)、「昆布」などとともラッコ皮を入手し、室町幕府に献上することにより、足利将軍家と直接結びつこうとしたのであろう。その背景にはアイヌ民族が15世紀の初頭にウルップ島のラッコ捕獲・交易に介在し、日本海に流通させるルートを開拓していたことがあったはずである。

史料(2)『大乘院寺社雑事記』7, 文明15年(1483)正月24日条

一、昨日楠葉入道来、色々物語、永享五年唐船ハ六艘也、～就中唐土エ可持物ハ、仮令百貫足ニテハ十色ニ物ヲ可持也、其時節々々ニテ不定故也、一物ニテ十倍、廿倍ニ成事モ在之、一物ハ一向ニ不立用シテアル物モアリ、能々可覚悟事也云々、イ王事ハ公方船計ニ積之、仮令申請ハ無相違事也、ランコ皮唐土ニテハ冬入者也、コ少 太刀 長太刀 ヤリ 銚子鍬 赤金 金 スワウ 吉扇 大綱如此者共也、

楠葉入道(1395—1486)は西忍といい、父「ヒジリ」は天竺人で、義満の時代に来日し相国寺の絶海中津の庇護をうけた。河内の楠葉の娘を妻とし、西忍が誕生した。父の死後、大乘院(興福寺の塔頭)の僧侶の妹を娶り、永享5年(1433)と享徳2年(1453)に渡明している(田中1984)。

永享5年の日明貿易では6艘、「公方船」の他に博多・堺の商人の船が仕立てられたが、日明貿易は「能々可覚悟事」とその投資的リスクが語られている。その交易品として「イ王」(硫黄)などのほか、冬の防寒用としての「らんこ皮」(ラッコ)などが堺・博多から輸出されている。ラッコ皮の数量は不明であるが、「覚悟」をもって行われているのであるから、需要動向に関する情報を入手していたのであろうし、ある程度の量が恒常的に日本に入ってくるルートが確立していたことを推定させる。

史料(3)『歴代宝案』巻6—22

国王尚巴志より(礼部あてカ)、国王および王相懐機に対する頒賜に対して進貢する咨と目録(1434年)

～謹しんで謝して備うる貢物は、金箔彩色屏風四扇～沙魚皮四千張、螺鈿殻八千五百個、海巴五百五十個なり。随抛して王相懐機の謹んで備うる貢物は、金箔彩色屏風二扇、金包靶結束虎豹皮銀竹長刀二把、金鍍銀結束銀腰刀二把、海獺皮一百張等あり。

『歴代宝案』は、琉球王国の外交文書、1424年以降のものを集成したものである。ここでは1434年の明への貢物として「海獺皮一百張」が記されている<sup>9)</sup>。本書の注には「海獺皮 らっこの毛皮」とあり、「かいだつひ」とルビを振っている。「海獺」は『日本国語大辞典』(小学館)によると「あしか(葦鹿)の異名」とあるが、中国語でアシカは「海獅」、ラッコは「海獺」である(『中国語大辞典』角川書店)。琉球王国の外交文書作成には久米村に移住していた中国人が関わっていたことを想起すると「海獺」は中国語のラッコとみて間違いない。

『歴代宝案』のラッコ史料は管見の限り、これ以外に見当たらず、ラッコ皮が琉球王国から明への公的な貢物となったのは1434年のみだったのかもしれない。いずれにしろ、この時点でラッコ皮が琉球にまで流通しているのは、その途次にも多くのラッコがもたらされたことをうかがわせる。

史料(4)『古文真宝彦龍抄』延徳2年(1490)頃

是等はらっこの皮な者共也。あちへ行こちへ行た

文明6年(1474)頃に成立した『文明節用集』に「獺虎(ラッコ)」が採録されている。しかも『古文真宝彦龍抄』には、ラッコの毛皮の特性を理解していなければ生まれない「らっこの皮な者」という表現が掲載されており、これが当時の人口に膾炙された用法であることを示している。『日本国語大辞典』は、この意味を「ラッコの手ざわりのよい毛皮。転じて、上下だれに対しても従順な人、他人の言うがままになる人をたとえていう」としている。このように15世紀の末にラッコ皮の特徴が転じた表現方法が生まれていることから推察すると、ラッコ皮は15世紀末葉までには相当量国内に流通していたと考えられる。

史料(5)『御内書要文』天文20年(1551)頃(今谷明2000)

獺虎之革袴到来、殊珍候間喜入覚候、猶貞孝可申候也

武田伊豆守とのへ

16世紀中頃、若狭守護武田義統(伊豆守)が將軍足利義晴にラッコの革(皮か)袴<sup>7)</sup>を献上していることが分かり、小浜の若狭武田氏が北方交易に大きな影響力を持っていたことがうかがえる。『新羅之記録』によると天文17年(1548)松前の蠣崎(武田)季広は、自らが出身と称している若狭の武田信豊の許に使者を派遣し、次の義統の代まで毎年書音を交換したことが記されている。天文17年正月24日は武田義統が足利義晴の娘を正室として迎えており、このことから推すと、この時期、蠣崎(武田)氏は安藤氏の影響力を削ぎ、若狭武田氏に直接結びつき、蠣崎(武田)氏→若狭武田氏→足利氏という関係を形成しようとしていたとみることができる。

なお袴の製作がどこで行われたのかは不明であるが、16世紀にはラッコ皮の特性に合わせた製品化が進んでいることが察せられる。

今のところラッコの初見は、応永30年(1423)の史料(1)であるが、史料(2)にあるように、日本側はラッコ皮が「唐土ニテハ冬入者」であるとの情報を入手している。また同じ時期、この情報は琉球王国にも流れていたようで、史料(3)のように一時は琉球経由で明にもたらされていた。日本では史料(1)・(5)のように、將軍家と結びつく献上品としても位置づけられていた。一方で、史料(4)に見られるように、ラッコ皮にちなんだ表現が生まれているように、上級武士・公家、あるいは豪商などにもかなり流通していたことが推察できる。

ところで、『新羅之記録』元和元年(1615)の条にラッコ皮に関する次のような記事がある。

元和元年慶広朝臣大坂の陳に立てしむの留守中六月、東隅の夷船数十艘来る。酋長螺邏稀阿犬獺虎数十枚持ち来る。其中に獺虎一枚有り、長七尺計り、肩幅二尺八寸余にて、背通の毛は長さ一寸二三分、腹方の毛は長さ一寸六七分なり。唯是熊皮の如し。螺邏稀阿犬の云はく、夷の中にて前代未聞の皮なりと。而して公広に見せしめざれば、彼夷云はく、大得意に渡さんと欲し持ち来ると雖も、上洛せらるるの条是非に及ばずとて景広に渡せり。後日、公広朝臣を始め一族の数輩之を見て、老衆皆云へり、季広朝臣の代に真白なる獺虎の皮来る事有りと雖も、未だ是の如き獺虎の皮を見ずと。其秋慶広朝臣の迎へとして、人をして持ち登らしむるの処、慶広下向の時駿河に於て此獺虎を家康公に上る。実に珍敷き獺虎なりと宣ひ、御欲悦浅からず在すの由、慶広朝臣帰国して談れるなり。

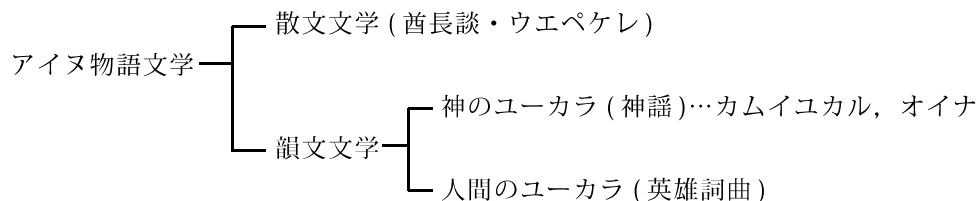
元和元年(1615)メナシ(道東部)のアイヌ、ニシラケアイヌらが数十艘の船団で松前に来た際に、ラッコ皮数十枚を持ってきた。その中に長さ7尺、肩幅2尺8寸もある、超大なものがあつた。アイヌにとっても「前代未聞の皮」であつたが「大得意」<sup>8)</sup>の初代松前藩主慶広に渡そうと持ってきたのであるが、大坂夏の陣で不在だったため、景広に預けて帰った。後日、これを見た老臣は季広(治世1545～82)の時代に純白なラッコ皮がもたらされたことがあるが、このような皮は見たこともないと語っている。慶広はこの皮を駿府の徳川家康に献上した。家康は「実に珍敷き獺虎なりと宣ひ、御欲悦浅からず在す」とのことであつた。

16世紀以降の蝦夷地では純白とか、超大な特別なラッコ皮が蠣崎(松前)氏へ献上品とされていた。残りの数十枚のラッコ皮は献上に回されず、一般の交易品として出回っていたことがうかがえる。史

料的には前掲のように 15 世紀の前半にさかのぼるが、15 世紀の初頭、あるいは 14 世紀まで遡る可能性もあろう。

### 3 ラッコとユーカラ「虎杖丸の曲」—アイヌ民族の成立との関わりで

知里真志保はアイヌの物語文学を下図のように分類した(知里 1973a)。



普通ユーカラという場合、人間の英雄を主人公とする叙事歌謡であるが、このユーカラをアイヌ史研究の資料として本格的に位置づけたのが知里である。知里はユーカラを、「ヤウンクル」[ya-un-kur「大陸・の・人」]を北海道を本拠とする擦文人、「レブンクル」[rep-un-kur「沖・の・人」]を大陸から海を越えて北海道の日本海岸の中部からオホーツク海岸の各地に橋頭堡を確保して住むオホーツク人と見立て、両者の間で起こった民族的な戦争の物語と解釈し、ユーカラの内容も、オホーツク文化が本道沿岸に栄えた時期に実際に起こった民族的な葛藤を歌ったものであると考察した(知里 1973b)。

榎森進は知里の見解を前提にしつつ、ユーカラの史的背景を再検討することにより、近世以前のアイヌ社会の実態にアプローチした。ヤウンクルは、人名の語彙表現上の特徴から、一筋の河川を中心に形成された河川共同体を形成する擦文人であるとし、レブンクルは、遠距離にありながらも一部でヤウンクルと接触を保つ集団であり、オホーツク人を中心とする北方の諸集団に比定できるとした。そのうえでユーカラは、オホーツク人をはじめとする北方諸集団と擦文人との抗争、矛盾関係が投影されたものと理解した(榎森 1979)。

このようにユーカラをアイヌの歴史的産物として読み解こうとする試みが行われてきたが、本章ではラッコが登場するユーカラを歴史資料として理解し、その背景にアイヌ民族のどのような歴史が隠されているのか、その一斑を明らかにしたいと思う。

ここでは金田一京助が大正2年(1913)に平取の鍋沢ワカルパ翁から採録した「虎杖丸の曲 変怪の憑依、恐怖の憑依」(金田一 1993a)を史料として使う。この「虎杖丸の曲」にはヤウンクル同士の戦い、ヤウンクルとレブンクルの戦いなど様々な戦いが語られているが、全9段構成のうち5段までがラッコの争奪を主因とした戦いである。

序曲にあたる第I段は、

ま、兄(と) ま、姉(と) われを育てて われら暮らしける：— 神工の山城の 山城のなかに われ育てられたり。

で始まる。「われ」の名前がこの物語のヒーロー「ポイヤウンペ」であり、住処は石狩市浜益あたりの「シヌタプカ」の山城であることがのちに分かる。次いで物語は、第II段に進みここで初めてラッコが登場する。

石狩の河口に 黄金のラッコが 出没する。こゝを以て 石狩彦 近き郷には 音信を跳ねとばし 遠き郷には 音信をぶつけて 云ひけるやうは：—『黄金のラッコを潜りてもつて 手捕りにしたらん人に わが妹をば わがもつ宝を その後ろに ひとつに束ねて 一緒にして その座右に 献ずるであらう』

突然にラッコが石狩川の河口に出没した。そこの首領である石狩彦はそのラッコを捕えたものに、妹と宝物を与えようと呼びかける。ポンチュプカ人、レブンシリ人、ポンモシリ人らが呼びかけに應えるが、ことごとく失敗する。ところがポイヤウンペは養兄・養姉に内緒で参加し、成功することで話は大きく展開する。

彼はシヌタプカに戻り、捕まえた黄金ラッコを祭器の上へ投げ棄て、何事もなかったように別棟で眠りにつくふりをする。黄金ラッコを見たヒーローの養兄カムイオトプシは、怒りに燃えながら次のように語った。

『われらの養育する神人 ならで 黄金のラッコを 打ち取りたるものあらんや。 かくなりては われらの郷ベ 無事にあるべきやう よもあらじ。 そのむかし在りたる事が 新たにいままた もちあがり来れり。 さすれば わが悪弟が 所業ゆえに そこより戦乱の出来 すべきこと必ず なるべし』

カムイオトシベは、ポイヤウンペ以外に黄金のラッコを捕えられるものはいない、こうなっては自分たちの郷も無事ではすむまい、さらに昔起こったことと同じようなことが新たに起ころうと語り、弟のこの所業により必ず戦乱が起こるであろうと悟った。

第Ⅲ段は、黄金ラッコをめぐる戦争に展開する。石狩彦の妹、石狩媛は黄金のラッコを捕えたものが神であろうと人であろうと嫁ぎたいとの気持ちを持っていた。ポイヤウンペはそれを無視していたところ、石狩彦の企てにより戦が起こってしまった。

かやうなる事をこそ われらが憂慮したれ、黄金のラッコを われらの養育す神が 殺されし事 いくさになつてしまひたり。 石狩びと おのが妹のために うらみにくみて あたりの島々を 催したて、 塵殺戦 寄せ来れり。 海路のいくさ 陸路のいくさ 別々に 途のさきさき 大声にことぶれもつ者 触れつたへながら やつて来るその声なりけり。

養兄姉らはポイヤウンペが黄金のラッコを殺したことで戦になることを憂慮していたが、案の定石狩彦が妹のために周辺の首領を誘い、皆殺し戦になったのである。

黄金のラッコをめぐる激しい争奪戦になり、ポイヤウンペは攻めてきたチュブカ人、レブンシリ人を殺害し、さらに奪取されたラッコを追いかけて乗り込んだ船でボンモシリ人打ち倒した。黄金のラッコは奪い返したが、船内の戦いが続いているうちに、その船はレブンクル・モシリ(沖の大地=樺太)にたどり着いた。そのコタンの首領は大声で次のようなことを言った。

『そのかみありし事 今の世にまた もちあがり来れり。 そのかみは 金山丹姫が 黄金のラッコの つがひのラッコの 憑ける婦女 にてありけるが、 牡のラッコを 石狩川の河口に 潜りて餌を求めさせ そのため起れるいくさ このオマンペシへ そのむかしも あがり来りき。 わが父の 好まざりしは いはれのなき戦 に味方をして 戦ふことを そを彼好まず。 それゆゑに シヌタプカびとの 味方 に立ちて ひとついくさ に相並びて 辛酸を共にしたまふ、 縁故のもと そこにあり。 それゆゑにて シヌタプカ媛 このオマンペシカの郷へ嫁ぎ来りしなり。 故にかうして居る所の 妹と 我とにてあるなり。 オマンペシカ媛なる わが妹は 土中に埋れたるものをも 巫術もてあらはし 雲中に隠れたるものをも 巫術もてくださ さばかりの巫者なり。 兼ねてより 醜石狩媛が それを餌におびき寄せ すといふなる 黄金のラッコ、 戦の因とならん とすと云ひ居りしに、 そのかみありし事の 新潮の末に(今の世にまた) 起りて 来ると見えたり。 我が村人だちよ 本島人なる首領のポイヤウンペは 本島人にはあれども わが縁者の首領なり そのやう攻めかゝらるゝものならば、 諸人と共に 彼が味方に われ立ちて ひとついくさ に相並びて 辛苦を分たんとするものなるぞ。 我が村人どもよ ただ目を向くるさへも 迅く 本島人なる弟の方へ 剛目を するものならば、 我が取り佩く太刀の 鋭刃の上 自らを横たふることを 汝等するであろうぞ!』

この戦いの原因となった黄金のラッコは、実は金山丹姫に憑依するつがいのラッコであった。以前そのうちの牡のラッコが石狩川の河口に出没したために戦が起こり、その結果、樺太の地にも戦乱が波及した。その時コタンの首領の父親はシヌタプカ人に与して戦った。その縁でシヌタプカの媛が父のもとに嫁いで、自分と妹のオマンペシカ媛が生まれた。妹は巫術に長けており、今回も予言通り黄金のラッコが石狩媛に餌でおびき寄せられ戦が起こった。ポイヤウンペは首領の縁者であるので、村をあげて味方となるとのことだった。

その後、ポイヤウンペは「黄金のラッコを われに渡して 利腕を自由に いざいざしたまふべし」と偽って自分が持つ黄金のラッコを奪おうとした石狩媛やチュプカ媛を斬り殺した。その後ポイヤウンペは苦難を潜り抜け、ついにシヌタプカの山城に生還し、手創を負って寝ていた養兄・養姉・カムイオトプシなどと勝鬨をあげた。これが第Ⅲ段の概要である。

第Ⅳ段は戦いが続いた後にシヌタプカの山城で酒宴を開くことになる。ところが岩鎧のシララペツン人、金鎧のカネペツ人がシヌタプカを襲い、シヌタプカの諸々が倒され、最後にポイヤウンペがその仇を討つが、ここで初めて虎杖丸と呼ばれる怪刀がその威力を発揮する。

次に第Ⅴ段はポイヤウンペがカネサンタで、このユーカラの副主人公である虚病媛 [Nishaptashum] を災厄から救い、凱旋する戦である。この段でカネサンタ媛は「ラッコの憑く女」と形容されているが、これを最後にラッコに関する表現は姿を消す。話の内容も虚病媛を奪取に来るチワシベツ人とのまったく別筋の話が始まる。

以上ラッコをモチーフとする構成のなかで一番興味深いのは、ラッコが石狩川の河口に出現したことである。先に述べたように、ラッコの生息域は日本の近海ではウルップ島を中心とする千島列島である。時には海流に乗り北海道東部沿岸・エリモ岬、三陸沖まで南下することもある<sup>9)</sup>が、もしウルップ島周辺のラッコが石狩川河口に出現したとすると、宗谷海峡を越えて日本海を南下するルートと、親潮に乗って太平洋岸を南下し、津軽海峡を通り抜けるルートが想定されるが、下の北海道周辺の海流図(図1)からうかがえるように、ラッコが海流に逆らって石狩川河口にやって来たとは考えがたい。叙事詩のモチーフがすべて合理的に解釈できることは考えないが、ラッコが戦乱の原因として語られたのであれば、ラッコが登場するそれなりの必然性があったみるべきであろう。

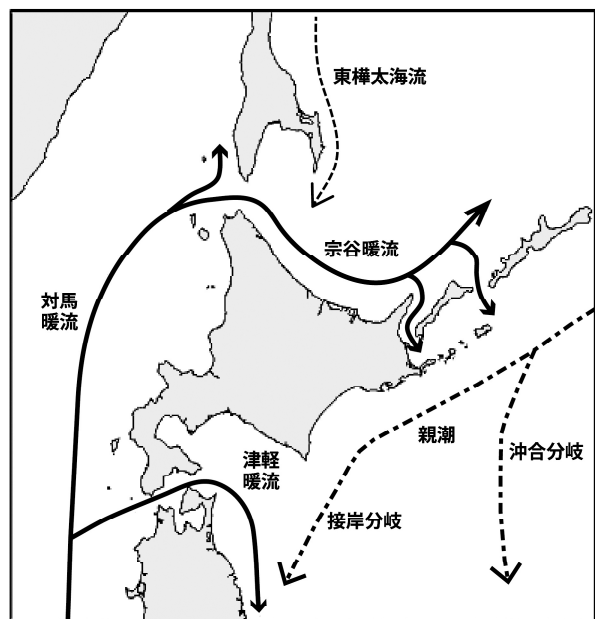


図1 北海道周辺の海流

(第一管区海上保安本部海洋情報部作成を参照)

そこで考えられるのが、交易品としてのラッコ皮である。ユーカラでは当初、生身のラッコが石狩川河口に出没していたが、ポイヤウンペが捕獲したのち「殺され」(Ⅲ段)、シヌタプカの山城の「祭器の並みいる上へ」(Ⅲ段)置かれた。毛皮としてのラッコが祭器として扱われているのである。しかもこの黄金ラッコはアイヌ語では [kane rakkol] と読まれている。アイヌ語で [kane] は金、金属を意味するが、「貴重な」「立派な」の意味もある(知里 1973a)。また水に濡れたラッコの毛皮は明かりに対して黄金色ではなく、白銀色に映える。とすると、『虎杖丸の曲』がいう [kane rakkol] は、黄金色のラッコではなく、貴重な価値の高いラッコというような意味ととるべきかもしれない。「虎杖丸の曲」にラッコが登場する背景には、交易品として貴重なラッコ皮の争奪がモチーフになっていると推察できるのである。

次に、ラッコがもともと憑依していた金山丹姫の山丹とは、樺太地方と比定されているが、サンタン地方(アムール川下流域)を含めていいのではないだろうか。この金山丹姫は以前つがいのラッコのうち、牝のラッコを石狩川河口で捕獲され、今回は牝のラッコをポイヤウンペに捕獲され、結局ポイヤウンペ側は金山丹姫に憑いていたつがいのラッコ二頭を奪うことになったのである。

この背景にあるのは、かつて金山丹姫側が握っていたラッコの交易権を北海道側が奪い取ったことにあるのではないか。前述のように北海道のオホーツク人はラッコと関係の深い生活を送っており、捕獲したラッコ皮はアムール川流域への交易品でもあったと推定される。ところがポイヤウンペが金

山丹姫に憑いたつがいのラッコを捕獲することにより、金山丹姫はラッコから完全に切り離されてしまう、すなわち金山丹姫はオホーツク人、あるいはそれに連なる集団を象徴していると考えられるのである。このエピソードの背景にはまさに樺太からアムール川下流域にかけての地域がラッコ交易から排除されるオホーツク文化の状況が反映されていると想定できるのである。

一方ポイヤウンペの先代から起こっていた戦いは、北海道側とレプンクル・モシリ(樺太)の集団との血の交流をもたらした。「ポイヤウンペは 本島人にはあれども わが縁者の首領なり そのやう攻めかゝらるゝ ものならば、 諸人と共に 彼が味方に われ立ちて ひとついくさ に相並びて 辛苦を分たん」(Ⅲ段)と見えるように、北海道のアイヌ民族と樺太のオホーツク人との間に血の交流が進み、強固な関係も生まれていたことを示唆している 13 世紀の後半には樺太とその対岸地域を舞台に、アイヌ民族と元軍との戦いが起こるが、強力な元軍との戦い得た背景には宗谷海峡をはさんだ両地域の極めて深い関係があったのであろう。

### おわりに

オホーツク文化のラッコ猟は 7 世紀から 9 世紀にかけて根室地方を中心に栄えた可能性を指摘し、ラッコ猟が栄えた背景に唐の建国を契機とした北東アジアにおける毛皮交易の隆盛を想定する見解がある(種市 2004)。管見の限りでは唐代の史料にラッコ関連史料を見出すことはできないが、千島列島のラッコ皮が樺太を経由してシベリア方面に渡り、それが中国へもたらされた可能性は高いと考えている。しかし 10 世紀初頭、中国では唐帝国が滅亡し、五代十国の分裂時代に入る。一方北海道では 9 世紀ごろから擦文人が道北地方に進出し始める。その結果、道東地方のオホーツク人は次第に樺太から切りはなされ、擦文文化の影響を受けるようになる。これがトビニタイ文化である。トビニタイ文化に変容したオホーツク人は、13 世紀には擦文文化に飲み込まれアイヌ文化への途を歩みはじめる。この間、千島→樺太→アムール川流域のラッコ交易のルートは、しだいに細くなり、それに代わり擦文人・アイヌ民族がラッコの交易権を掌握するようになったと察せられるのである。

如上の通り日本側の史料にラッコ関連の史料が現れるのは 15 世紀以降であるのだが、それはそれ以前がアイヌ民族によるラッコ皮の交易ルートの掌握過程にあったことを示唆している。「虎杖丸の曲」に、石狩川の河口に出没した黄金のラッコをポンチュプカ人・レプンシリ人・ポンモシリ人が捕獲に失敗し、最終的にポイヤウンペが成功するエピソード、さらにポイヤウンペが捕えた黄金のラッコをチュプカ人・レプンシリ人・ポンモシリ人が奪取に来るエピソードは、ラッコ皮の交易権をめぐる争いが北海道・樺太を巻き込んで展開されていたことを示していると推測できる。

この争いを経て、千島→北海道太平洋沿岸→道南部→日本海(十三湊・若狭)のルートが整備され、15 世紀の史料の存在につながると考えられる。

1457 年にコシャマインの戦が勃発する。コシャマインは道南 12 館のうち 10 館を陥落させている。館が交易の拠点としての性格を持っていることから推すと、この戦いの背景にラッコなどの交易の主導権を握ったアイヌ民族と既得の交易権を持つ館主層との対立があったと想定することは可能であるが、詳細は今後の検討に期したい。

### 謝辞

本稿を作製するに当たり、東京大学史料編纂所のデータベースを一部利用させていただきました。また沖縄県教育庁文化財課外間みどり氏、鳥羽水族館飼育研究部石原良浩氏に貴重なご教示をいただきました。札幌国際大学藤垣エミリア氏には英文サマリー作成にご尽力いただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

### 註

- 1) ラッコの毛皮は 1 cm 四方に 14 万本の毛(ガードヘア 1 本につき、アンダーヘア 60 本の比率)が生えており、全体で 8 ~ 10 億本にもなる。この微細なアンダーヘアを絶えず毛繕いをしながら

気泡を入れ、耐寒性と浮力を得ている。仰向けになったラッコのアンダーヘアは海水によって常に矢羽状になびくのである。オホーツク人はそのようなラッコを観察したうえ彫物を作製した可能性が高い。

- 2) 近世史料(羽太正養『休明光記』など)には管見の限り、樺太アイヌの交易品としてラッコは出てこない。
- 3) 諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店 1955)「海獺」の出典・用例に拠った。
- 4) ちなみに東京大学史料編纂所作成のデータベースで「葦鹿」「海驢」で検索してみると、古記録のデータベースに「葦鹿下鞍」『小右記』万寿元年(1024)11月8日条、「葦鹿毛皮」『後二条師通記』寛治6年(1092)1月28日条、天仁元年(1108)10月21日条に3か所あるのみである。
- 5) 蓑島栄紀(2005)は、このほかの史料の分析から、黒貂の毛皮の流入は9世紀の後半かなり増大したと推測している。
- 6) この史料の存在は、上里隆史「ラッコとサメの贈り物」『目からウロコの琉球・沖縄史』のサイトで知った。<http://okinawa-rekishi.cocolog-nifty.com/tora/2010/05/post-7dda.html>
- 7) 日本の史料にラッコの用途がはっきり記されているのは珍しい。このほか『福山秘府』の正徳5年条には「鞍覆」とある。
- 8) 谷本晃久(2011)は、「得意」の意味を分析し、「蠣崎氏側がアイヌ側が欲する宝物を齎し、おそらくその返礼にアイヌ側が蠣崎氏側の欲する産物を齎す関係が成立している状況を、蠣崎氏がアイヌの「得意」となっている、と表現している」と述べ、「得意」が蠣崎季広によって、アイヌとの交易関係が一元的に掌握される段階で使われたと理解している。
- 9) 北海道では2009年2月から5月にかけて釧路川に現われたラッコのくーちゃんが有名であるが、その前年8月から9月にかけて宮城県女川沖にもラッコが出没した(9月10日『河北新報』配信)。このように日本の太平洋岸には親潮に乗ってラッコがやってくることもある。

#### 引用・参考文献(五十音順)

- 天野哲也・B. Fitzhugh・V. Shubin(2007)「千島列島にオホーツク文化の北限を求めて」、『北大千島研究の系譜』、北海道大学総合博物館、札幌
- 今谷 明(2000)「室町幕府御内書の考察」、『室町時代政治史論』、塙書房、東京、pp.250-301
- 榎森 進(1979)「ユーカラの歴史的背景に関する一考察」、『史潮』新5号、東京、のち榎森(1982)、pp.17-73に再録
- 榎森 進(1982)『北海道近世史の研究』、北海道出版企画センター、札幌
- 大塚和義(2001)「ラッコの道」、『ラッコとガラス玉』、国立民族博物館、吹田、pp.8-10.
- 大塚和義(2003)「北太平洋の先住民交易と其歴史的意義」、大塚和義編、『北太平洋の先住民交易と工芸』、思文閣出版、京都、pp.5-16
- 大塚和義(2005)「環日本海における毛皮の生産と流通」、大塚和義・小泉格・丹羽昇編『日本海学の世紀』5、角川学芸出版、東京、pp.210-222
- 川上 淳(2003)「日露関係のなかのアイヌ」、菊池勇夫編、日本の時代史19、『蝦夷島と北方世界』、吉川弘文館、東京、pp.260-314
- 菊池俊彦(1995)「オホーツク文化に見られる鞣鞣・女真系の遺物」、『北東アジア古代文化の研究』、北海道大学図書刊行会、pp.31-131
- 金田一京助(1993a)「虎杖丸の曲 変怪の憑依、恐怖の憑依」、『金田一京助全集』、第9巻アイヌ文学Ⅲ、三省堂、東京、pp.5-135 [1993a・bの初出:金田一京助(1931)『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』、東洋文庫論叢、第十四之二・一、東京]
- 金田一京助(1993b)「ユーカラ概説」、『金田一京助全集』、第8巻アイヌ文学Ⅳ、三省堂、東京、pp.7-336
- 黒島 敏(2005)「室町・戦国期の安藤氏と小鹿嶋」、東北中世考古学会編、『海と城の中世』、高志書院、東京、pp.129-146
- 児島恭子(2003)「日本史のなかのラッコ皮交易」、大塚和義編、『北太平洋の先住民交易と工芸』、思文閣出版、

- 京都, pp. 32-35
- 澤井 玄 (2012)「千島列島出土の擦文土器」, プロコーフィエフ, M. M., V. A. デリューギン, S. V. ゴルブーノフ, 『サハリンと千島の擦文文化の土器』, 訳者中川昌久, 監修者菊池俊彦, 中村和之, 函館工業専門学校, 函館, pp. 130-137.
- 関口 明 (1987)「渡島蝦夷と毛皮交易」, 佐伯有清編『日本古代中世史論考』, 吉川弘文館, 東京, pp. 225-248. のち関口 (2003)『古代東北の蝦夷と北海道』, 吉川弘文館, 東京, に再録
- 関口 明 (2006)「日本の古代社会とクマ信仰」(天野哲也・増田隆一・間野勉編, 『ヒグマ学入門』, 北海道大学出版会, 札幌, pp. 124-136
- 谷本晃久 (2011)「アイヌ史的近世、をめぐって」, 蓑島栄紀編, 『アイヌ史を問いなおす』, 勉誠出版, 東京, pp. 44-56
- 種市幸生 (2004)「オホーツク文化の毛皮」, 『アイヌ文化の源流を探る』, 財団法人北海道埋蔵文化財センター編, 江別, pp. 19-22
- 田中健夫 (1984)「楠葉西忍」, 『国史大辞典』 4, 吉川弘文館, 東京
- 知里真志保 (1973a)「アイヌの神謡」, 『知里真志保著作集』 第1巻, 平凡社, 東京, pp. 155-222
- 知里真志保 (1973b)「ユーカラの人々とその生活」, 『知里真志保著作集』 第3巻, 平凡社, 東京, pp. 5-64
- 知里真志保 (1973c)「樺太アイヌの説話(一)」, 『知里真志保著作集』 第1巻, 平凡社, 東京, pp. 253-372
- 蓑島栄紀 (2005)「平安貴族社会とサハリンのクロテン」, 『北方島文化研究』 3: 35-8